

平成26年1月から

ごみの分別が**変わります!**

可燃ごみに
なります



夏休み親子教室

『ダンボール方式生ごみ(減量・堆肥化)講習会』(ダンポスト)

日本では「燃やせるごみ」の約3～5割が生ごみ(ほとんどが水分)です。この生ごみを焼却するには多大なエネルギーを必要としますが、大地に還せば貴重な資源(堆肥)になります。

私達あきる野ごみ会議のメンバーは日頃よりごみの減量等の環境教育は「小さい頃から学ぶことが大切である」と考え、今回この様な講習会を開くことにしました。

夏休みが始まってすぐの7月23日(火)市内在住の小学生とその保護者の方々4組9名が参加してくれました。当日はシャベル片手に朝食時の野菜や果物の皮、卵のから等各自持ってきてもらい、実際にダンポストのキッドを使い中に入っているピートモスともみがらくん炭を箱にセットし、次に生ごみをはさみで細かくしその中に入れてよくかきまぜる作業をやりました。

最初は少し緊張した表情の子ども達でしたが、講師の佐野会長の丁寧な説明や質問タイムもあり、少しずつ慣れ楽しいのか何回もかき混ぜているお子さんもいました。(T.A)

講習会に参加して

東秋留小学校 6年 N.Hさん

最初「ゴミなんて」と思っていました。参加する前の私の生ゴミのイメージは「きたない」でした。しかし生ゴミをダンポストに入れることによって栄養豊富な肥料になることにとってもびっくりでした。講習会でのお話はとても分かりやすくとても良かったです。

私は今でもダンポストを続けていますが、やっているうちに分かったことがありました。例えばコバエがわいてしまった時、熱湯を入れるとすごくよく効くなどです。講習会を受けてから生ゴミのイメージは「ダンポストを使えば肥料になり、ゴミの減量にもつながるもの」に変わりました。私はこれからもダンポストで生ゴミを減量したいと思います。



使用済小型電子機器は資源になります



※使用済小型電子機器は、資源として**月2回**無料で回収します。

編集後記

日本人のティッシュペーパーの大量消費の話が気になるのは、それがイコールゴミだからだろう。バブル崩壊から20余年、全てのものがリサイクルされていたという江戸時代が賛美され、落ち葉が木の根元に長年放られ都内随一の肥沃な土地を誇る明治神宮が新聞のコラムで称えられ、『Always 三丁目の夕日』に出てくるような昭和の時代が懐かしまれてきた。そんな背景には浪費のなかった時代への回帰願望があるのだろう。

さて昨今SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)は時に知らない人から思いがけない情報を提供してもらえる場となる。そこで先日偉大な人物の存在を知った。知る人ぞ知る『わら一本の革命』の著者福岡正信氏だ。

20年も前の貴重なインタビュー映像(NHK)を添えて氏の情報が得られた。わらを田んぼに投げ粘土団子を畑に投げる自然農法の実践者。近代化の農業に一石を投じた氏の農法は世界の農業者に影響を与え(アジアのノーベル賞と言われるマグサイサイ賞を1988年に受賞)、脈々と多くの農業者に受け継がれている。そこにはわら一本、草一本、すべて土に戻す循環のロマンがある。

オリンピック招致決定で沸き立つご時勢だが、オリンピックという光の影で、土に戻らぬゴミに脅える震災後の日本。循環のロマンが新しい時代を彩ることになると心楽しいものである。

(R・K)

ごみ情報誌

発行・編集 あきる野ごみ会議

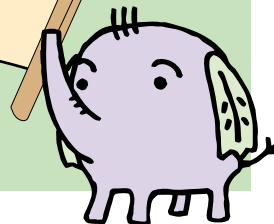
へらすぞう

第18号 2013年12月



げん人くん

へらすゾウ



あきる野ごみ会議は、市民・事業者・市の3者が協力して活動している団体です。

花咲おばさん

前田小学校近くの舞知川(もうちがわ)に沿った歩道脇のスペースには、コケのじゅうたんの中に色々な花が植えられています。季節ごとに移り変わる花々は、通る人たちの目を和ませてくれます。

実は、その花たちは7年前からコツコツとお花を植え、世話をし続けている『花咲おばさん』の**お・も・て・な・し**なのです。その名は佐藤清子さん(79歳)。

丁度歩いている時に、シャベルを持ってお花の世話をしている佐藤さんに出会い、お話をうかがったのでした。

7年前、隣のおばあさんが、家の前の歩道の草を一生懸命草取りをしていて、「手伝いましょうか」と声をかけたのが始まりでした。

天気のよい日は毎日、そのおばあさんと一緒に3時間ぐらい草取りをし、佐藤さんはそのあとに少しずつパンジー、松葉ぼたんなどを植えていきました。冬は枯葉のお掃除が待っていました。

そうこうするうち、その川沿いの花壇の距離はどんどん延びて、現在のように南北道路を越えて前田小の川沿いまで続いているのです。町内会やお隣の自治会の人と植える花に加えサカタのタネをとりよせて、種類も増えていきました。

佐藤さんは「なるべく自然に還して、きれいな花を植えて、通る人の目を楽しませ、皆の気持ちが明るくなったらいいな」と考えているのです。

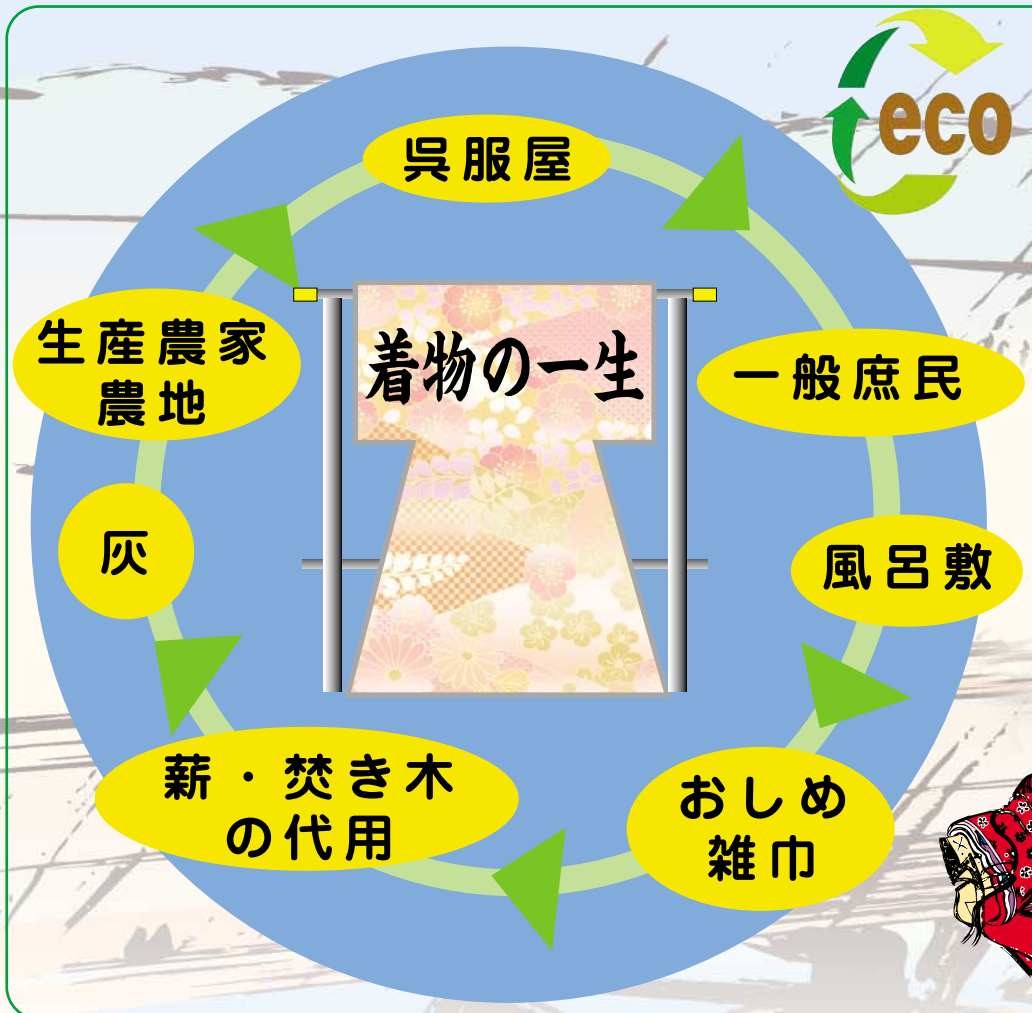
「今年の夏は特に暑く、苗を植えて元気に育つか心配でしたが、近所の方々が水遣りをしてくださったので、お蔭様で百日草の花がたくさん咲いています。」

このあきる野には、きっと佐藤さんのように自然を大事に、街を美しくする方々がいっぱいいるような気がします。そんな心が広がって、益々あきる野は豊かな街になるでしょう。

(M.T)



ecoな生活江戸に学ぼう!



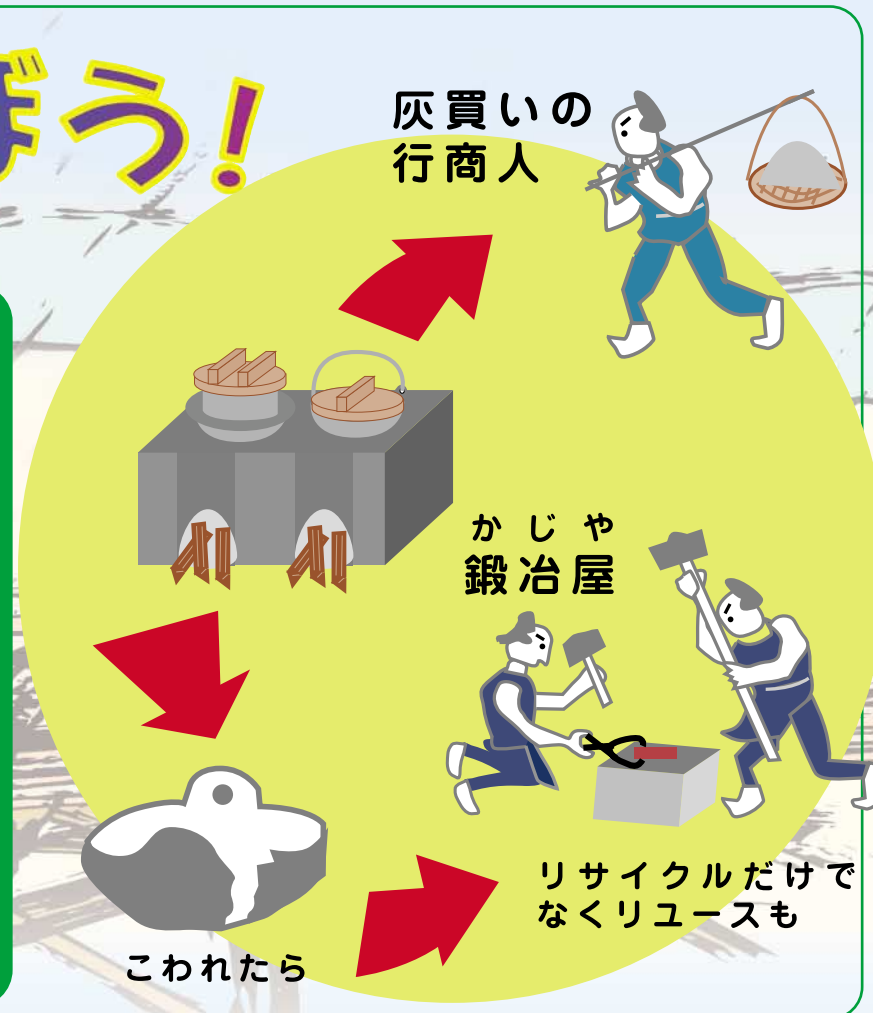
ごみさえも循環させる環境に優しい仕組み

環境面で見ると、江戸時代の日本はとても優れた社会でした。その根底にあったのは、人間をはじめとする動植物によって消費されたものすべてが自然に還り、再生されてまた生命を維持するエネルギーを提供するという循環です。

都会生活をしている人は、ごみを直接土に還す機会はほとんどありませんでしたが、それらは仲買人をおして確実に生産地に届けられ、畑の肥料になりました。

またそれらのごみは煮炊きするための薪の代わりや暖をとる火として庶民に利用されることも多かったのです。紙や木、麻や木綿などの植物性製品は、燃焼すると二酸化炭素を出して植物に吸収されます。植物はこの二酸化炭素と太陽の光で成長し、食べ物や繊維など人間の必需品を生成してくれます。

薪として燃やされた物の残骸である灰は、一般家庭ばかりでなく、さまざまな産業にも欠かせないものでした。灰買いの行商人が各家庭を訪問して仲買をするほど価値がありました。庶民は自分の家で使う分を残して、灰を売って生活の足しにしました。(T.A)



日本人はブータンの人の150倍「紙」を使っている

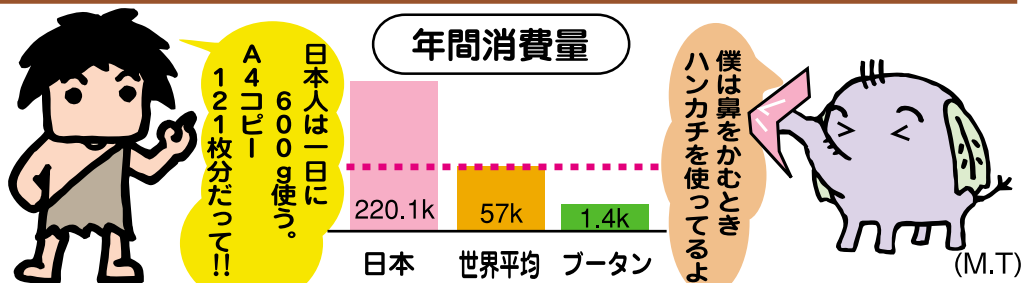
紙といってもいろいろ日常生活のティッシュ、トイレトペーパー、本類、コピー用紙、産業で使うダンボールなど

世界全体で平均すると年間1人 **57kg**の紙を使っているらしい。

ちなみに、紙・板紙の生産量については、日本は中国、アメリカに次いで3番目に多い。(2,663万トン)

国民一人あたりの年間消費量(2011)は?

多い順	少ない順
1位 ベルギー 317.4キロ	1位 アフガニスタン 0.2キロ
2位 オーストリア 260.7キロ	2位 タジキスタン 1.1キロ
3位 ドイツ 243.2キロ	3位 ネパール 1.2キロ
4位 アメリカ 230.6キロ	4位 ブータン 1.4キロ
5位 アラブ首長国連邦 224.8キロ	5位 ハイチ・ラオス 1.6キロ
6位 日本 220.1キロ	



あきる野市の「ごみ処理費用」は…

あきる野市ではごみにかかる処理費用は赤ちゃんから高齢の方まで一人当たり、1ヶ月で約1,250円です。

(4人家族の場合1,250円×4人=約5,000円)

一方、世界でいち早く「ゼロ・ウェイスト」宣言をしたオーストラリアの首都キャンベラ市の費用はあきる野市の1/5の約250円です。この金額の違いの理由の1つには生ごみを燃やさず、環境的にも経済的にも優れている家庭での堆肥化が進んでいることがあります。少しの手間で生ごみの量が激減し、有料ごみ袋代も減ります。

今日からあなたも生ごみの堆肥化にチャレンジし、税金も家計もスリムにしませんか?

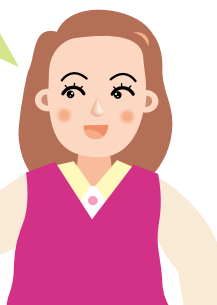
※ゼロ・ウェイストとは明確な達成目標を設定し、焼却せず環境負荷を減らしながら具体的にごみを出さないようにする手法のこと。

ゼロ・ウェイストの3大目標は

1. 有害物質を排出しない。
2. 大気汚染しない。
3. 資源を無駄にしない。

参考資料「ゴミポリシー」

ロビン・マレー著 (英国産業経済学者)



(T.A)

自然の循環の中で生活する。



リサイクルの中には新たな資源とエネルギーを使うものがたくさんあります。その点、生ごみの堆肥化は自然が育ててくれた食物の残りを、再び自然の中に返すもので、新たな資源とエネルギー(人の労力は除く。人が持つエネルギーは大いに使うべきです)をほとんど必要としません。人の生活が自然の循環の中にすっぽりとはまり込んでいて、その意味でリサイクルの優等生と言えます。

雨水の利用もそのような自然の循環の中での生活といえましょう。私の家では家の横にポリバケツを四つ置いて雨水を溜め、その水をジョウロで庭の草木にやっています。バケツには1時間50ミリの大雨が降っても、そのままでは50ミリ=5センチしか雨水はたまらないのですが、幸か不幸か築30年以上経っている私の家の雨樋は詰まったり破損していたりで、樋から大量の雨水があふれ出します。15~30分まとまった雨が降れば、バケツはたちまちいっぱいになります。

今まで夏は夕方になると水道の蛇口から長いホースを引いて庭に水をまいていたのですが、今年の夏は水道水をほとんど使うことなくのりきる事が出来ました。(Y.S)